

# 紙上法話

## 正師

センター布教師

東林寺

越海

暢芳



私は、専門僧堂に入って、まだ間のない小参の折、堂頭老師に向かつて、「堂頭和尚は、正師や否や」と問いました。小参の後、「堂頭和尚は、正師に決まっておる」と、一人の老師から厳しいお叱りを受けました。

私は、大学三年の時、高校時代の友人が、仕事場の事故で亡くなったという知らせを受けました。

その時、私の心に湧いてきたものは、まことに薄情なことですが、友人の死を悼むものではありませんでした。今、自分が生きているということが恐ろしくなつたのです。

今、自分が死んでしまうということを考えたことがなかったのです。

その恐ろしさは、今の自分では死にたくないという思いから出てきていました。

それならば、いつ死んでもいいと思える生き方をすればいい。いつ死んでもいいという生き方は、どういう生き方が私の考えは、ここまですり詰まっています。

就職活動にも手がつかず、徒に日を過しておりましたら、「何もしないよりは、働きながら考えればいいじゃないか」と、働き場所を紹介して下さる方がありました。

働き始めて痛感したのは、自分の生き方が決まっていなないと、何をしても方向が定まらないということでした。ふがないと思いつつも、どうすることもできず、気持ちが沈むばかりでした。

そんなある日、本屋で、「正法眼蔵」「山田霊林」という、聞き覚えのある文字を見つけました。

「正法眼蔵随聞記講話」と書かれたその本に出てくる人達に、私は驚きました。このような生き方があるのか、このような生き方をしている人達がいるのかと。

私は毎朝、職場で一話読んでは、仕事を始めるようになりました。

一話、一話に励まされ、読むことに気持ちが楽になりました。

私は、このような生き方をしている人に会ってみたい。このような生き方が自分にもできるのなら、してみたいと思うようになりました。

「正師を得ざれば、学ばざるには如かず」

専門僧堂に入りこのお示しに接した時、「堂頭和尚は、正師や否や」と、問わずには、おられませんでした。

「尊公の裁量に任す」

と、堂頭老師は、答えて下さいました。

自分自身で確かめてみるということは、その人に親しく仏道を学ぶ以外にはありません。私の心は決まりました。

私は、幾人もの正師に出会えたことで、今、自分が生きていることの有り難さを知ることができました。

そして、この有り難さが、今を生きる力になっています。

この有り難さを、拙くとも、仏道に親しみ学ぶことで、伝えていきたいと願っています。